

TSUQUIDA HIDEKO FADO CLUBE JORNAL

D

月田秀子の昨日、今日、明日…

<ギタリスト来日顛末記>

12月2日(土)午後3時20分、カルロス、レロ両ギタリストを乗せた日本航空426便は無事関西空港に到着。リスボンからパリまで2時間。パリから大阪まで12時間。計14時間の長旅の疲れも、どこかへふっ飛んでしまったように、再会の喜びに私たちは抱き合い両頬にキスを交わし合った。

—丁度2ヶ月前の10月3日の深夜、私はリスボンにいた。夜11時すぎにリスボンのリベルダーデ大通りに面した小さなホテルにチェックインしてすぐ、わたしの足はバイロアルトのファドの店『カフェ・ルーズ』に向かっていた。

『カフェ・ルーズ』かつてアマリア・ロドリゲスが歌っていた店ではあるが、今は、ファドだけでなく、ポルトガルの観光ガイドを兼ねたようなスライドを混ぜながらの各地の民謡やフォークダンスもショータイムで披露してくれる店である。12時を過ぎ、団体観光客の姿も消えると、客席をアコーディオンカーテンで仕切り、本来のファドの店に様変わりする。ステージもなく、マイクを通さないギター演奏と共に、くつろいだ、ゆったりとした時が流れ始める。

最後のショータイムの前の慌ただしい中、ギターのレロが店を抜け出してきてくれた。12月にコンサートをする際、ポルトガルギターを弾いてくれるギタリストを探しに来た旨を伝えると、カルロスに声をかけてくれると言う。ファドの伴奏は、息の合った者同志でないと無理だから、自分も一緒に日本へ行くと言う。カルロスが出演しているファドの店『アデガ・マシャド』へと向かった。演奏中のカルロスがびっくりした顔でこちらに目配せをした。おぼつかないポルトガル語での出演交渉は10分程で

すんだ。彼等とは1993年、リスボンのマリア・マトス劇場でのリサイタルの時共演しているとは言え、そんなに簡単に来日の承諾を得られるとは夢にも思っていなかった私は、その夜、ほとんど眠れなかった。いつも伴奏してくれている佐野、池側両氏にどう了解を得るか、彼等の渡航費、出演料をどう捻出するか、浮かれてばかりではいられなかった。

30年近くアマリア・ロドリゲスのギタリストを務めて来たカルロス・ゴンサルヴェスの年は推して知るべし、レロは私と同じ年、決して若いとは言えない二人のギタリストは、逗留するホテルへと向かう車の中でいつの間にか眠りに落ちていた。8時間の時差、狭い機内での14時間、はるばるユーラシア大陸の西の果てから、私のために馳せ参じてくれた大切な友の寝顔に向かって「O b r i g a d a (ありがとう)」と言った。その気配に目を覚ましたレロが開口一番、舞台衣装を忘れてきたと言う。奥さんがちゃんと靴からネクタイまで揃えてベッドの上に置いてくれたのに、そのまま、忘れてきたと言う。その騒動に目を覚ましたカルロスは、睡眠薬と間違えて栄養剤を持ってきてしまったので睡眠薬を調達してほしいと言う。大事なギタリスト達のお守り役がその時から始まった。

—急遽、送迎役から衣装調達係迄やることになった
オフィス野口の野口氏から聞いた怖い話—

ギタリストを関西空港迄迎えに行く日の午前中、奥方の要請で天満の松坂屋デパートまで行った帰りのこと。「車体が傾いているような気がするけど。」との奥方の言葉に、ガソリンスタンドで見てもあったところ、長さ10センチ程の太い釘がタイヤに刺さっているのが見付かったそうだ。もし、その時知らずに空港まで行っていたら高速道路上で、ギタリスト諸共大事故に遭っていたに違いない。「彼女をして、何者かが警告してくれたんだ。僕にはよくあることだけどね。」そう言ってハンドルを握る彼の腕の数珠が不気味に光った。
(次ページへ)

サンケイホールでのコンサートを無事終え、翌日は東京でファド倶楽部の有志がディナーショーを企画してくれた。上京する飛行機の上で二人は上機嫌だった。終盤で歌うはずの「かもめ」を抜かしたことをカルロスはその時迄気が付かなかったようだ。「かもめ？飛んでみたいだね。今頃はリスボンの空かな。」そう言って私たちを笑わせた。「夕べは大成功だったね。テレビの撮影もあったし。」カルロスが言う。ビデオ収録のためのカメラの事だ。何としてでも記録に残したく私自身で手配したものだ。プロモーションからマネージングまで全て自分でやっている事を知ってびっくりした様子だった。以下はカルロスの私への今後の活動のアドバイスの要約である。

- ・ファドのアルマ（魂）は本当のファディスタにか宿らない。それを持っているのはアマリアしかない。そして日本にHIDEKOがいる。いつまでも無名に甘んじてはいけぬ。HIDEKOの歌をもっと多くの人に知ってもらうための努力をする事。
- ・難しい事を言っているは大衆の支持は得られない。例えば、涙のメロディは覚えやすく、歌詞も解りやすいためポルトガルで、ヒットした。
- ・日本でファドを定着させるには、まず日本語で歌うこと。原詩から離れてもいい、自分の言葉でファドのメロディにのせる事。

アレルギー性鼻炎の為、ハンカチで鼻を拭き拭き熱心に、成田空港で別れるまで延々と説いてくれた。

2年前、リスボンでコンサートをした時の彼とは明らかに違っていた。「いいコンサートにしよう」一回目のリハーサルを終えた時、私たち、カルロスとレロと私はお互いに堅く手を握り、誓った。2年前はそんな事もなかった。カルロスは気難しそうに見え、私の歌を聴いていなかったように思えた。「HIDEKOは自分の歌いたいように歌えばいい。僕たちはしっかり付いてゆくからね。」コンサート前に言ってくれた一言がどんなに心強かった事か。彼が足を乗せている椅子に手をやりながら「涙」を歌ったとき、椅子が小刻みに震えていた。彼のファドへの思いが椅子を伝わって私の心に届いた。「ぼくには解る。歌い手との息の合わせ方がファドの醍醐味だということが。40年以上ファドのポルトガルギターを弾いているけど、いまだに駄目なんだ。だからこそやめられないんだ。」

彼等は、私にファドを歌い続ける力を与えて、日本を去った。あの日のコンサートの曲を歌うとき聞こえてくるのはカルロスのギター。それは当分続きそうだ。健二さん、忠さん、ごめんなさい。

月田秀子

ensaio

「ただひたすらに“ファド”に“夢”を追って」

幕が降りた。鳴り響く喝采、ざわめきの中に私はうずくまったまま立ち上がる事ができずにいた。

チラシ配り、ポルター貼り、チケットの送付に始まり、終演後の挨拶回り、ポルトガルからギタリストを迎えての、送迎、食事のお世話等々…心労も多々あった事でしょう！

二時間の長時間、炎々と観客に感動を与えての終幕。

（どこにこんなエネルギーがあるのかなあ？）

二人のギタリストの演奏も本当に素晴らしかった。

ここで一言お詫びを…。月田さんごめんなさい。事前にお許しもなく、勝手にバラを投げたりして…。花を投げるのは、た易いこと。“生かされてこそ命”月田さん、貴女はその命を胸元で見事花開かせて下さいました。舞台上にクッキリ浮かんだバラ二輪。

来年につなぐ様に…、語りかける様に…。

ファド倶楽部の数人の方達より「家路に辿り着く道すがら、又、帰途についても、余韻が残り『夢』をもらった心地で幸福でした。」の声を、言葉をいただいた時、

「月田秀子のファドは生きていた。

月田さん、ありがとう！

ファド倶楽部の皆さん、ありがとう！」

夢を追い続けてきた私にとって、月田秀子のファドは、今が旬である。

井本良子

●『月田秀子ファド倶楽部』入会案内

<申込方法>郵便振替でお願いします。

口座番号：00990-6-18440

加入者名：月田秀子ファド倶楽部

<会費>入会金/2,000円 年会費/3,000円

●会報制作及び事務局スタッフ募集

男女・学歴・年齢・貧富不問。交通費・食費自前。完全無給。

●前略 カルロス・ゴンサルヴェス、レロ・ノゲイラのギター、月田秀子のファドで熱気に包まれた会場の雰囲気は冷めやらぬ裡、手を差し伸べて近寄って来られた井本良子さんの顔を見ると目に光るものがありました。ファド倶楽部、貴女に懸ける熱い思いと大盛況だったコンサートの興奮がそのまま彼女の手から伝わってきました。

高橋竹山の津軽三味線が東北の厳しい風雪、風土を思い起こさせる様に、カルロス・ゴンサルヴェスのポルトガルギターはヨーロッパの西端、イベリア半島に有りながら、暗い貧しいポルトガルの風土を想像します。(ポルトガルに関する知識は皆無に等しいのですが)スペインはアルハンブラ宮殿、フラメンコ、闘牛の華麗、情熱という感じです。(スペインはヘミングウェイの小説を読んで。)「ポルトガルへ行きたい」買いました。読んでみます。

コンサートが始まり、ポルトガルギターのファドイントロダクション。ずっと聴いていたいと思いました。貴女のファドもですが!

カルロス・ゴンサルヴェスのポルトガルギター、高橋竹山の津軽三味線と共通して居る物を感じました。

良かった。素晴らしい。おめでとー!

(京都 N・Y雄)

●月田さんのコンサートはじめて聴かせていただきました。2時間がアツと言う間でした。アップテンポの曲、切々とした曲…彼方に向かう声の豊かさ、そして誠実さと正直さがにじみ出るようなステージに心が揺さぶられ、ファドはじっと聴くより歌うものだと思ってきました。“難船”はないのかしらと思っていましたら、最後にありました。帰り途、そして今もこの曲が私の心の中に響いています。アマリア・ロドリゲスが偉大なのは月田さんをファドのとりこにしたから、そして月田さんの偉大さは私のような者にファドの種を蒔いてくださるからそんな気がしてなりません。すばらしいコンサートをありがとうございました。お疲れになりましたでしょう。夜中の2時を過ぎ風ははげしくなってきました。明日はひときわ寒くなりそうです。お風邪をひかれませぬように。お元気で、これからも心のままにファドを歌い伝えてください。

95.12.6

(大阪 K・R子)

●前略 昨日はサンケイホールでのコンサートお疲れさんでした。女房といい席でファドを堪能させていただきました。回を重ねる度に、ポルトガルの雰囲気がよく伝わってきます。といっても私は現地に行ったことがないので…。貴女の歌唱力は、ファドのコンサートをはじめて開催した頃と比べ格段にお上手になっていることは貴女のファン誰もが異論のないところだと思います。しかし素人が歌唱力の上手、下手を論じるのは見当違いで、本当はコンサートが楽しいか楽しくないか、あるいは心地よかったか悪かったかの判断で評価を下すべきだと思います。そんな観点から、昨日のコンサートについてちょっと感じたことをお伝えして今後の参考になれば

と思います。当日アンケート用紙に記入すれば良いのですが、限られた時間、限られた場所で心の内を伝えることはおおよそ不可能です。

まず、今回のバックのギタリストが本国からやってきたベテランでとても迫力がありました。アマリアのバックを務めるだけあってポルトガルギターの澄んだ硬質の音色に思わず引き込まれてしまいます。2人だけのバックで、貴女のファドがとても好く生かされていたと思います。けれど残念に思ったのは、貴女の性分がそうさせるのでしょうか、全体に(舞台意匠、演出進行、ライティング、舞台構成等)真面目すぎて息が抜けなかった点です。舞台と客席との一体感に欠けていたのではないのでしょうか。客席の雰囲気が盛り上がった場面で、舞台がそれに反する構成になったり、貴女のおしゃべりがたどたどしかったり、どうもちぐはぐでもどかしさが残りました。せっかく舞台上に投げられたたくさんのバラをそのままにして…等も大変気になりました。

大部分のお客がファドが始めてで、貴女を充分に知らない(少なくとも私よりは)と思います。そんなお客の一人一人の心に残るコンサートになってこそ成功といえるのでしょうか。私を含めて古い貴女のファンは、貴女のファドが健在であることを確認するだけで充分満足でしょうし、たとえポルトガル語がさっぱりでも、ファドを何度か聞いてその訴えかける何かを知っているからいいようなものの、初めてのお客には馴染み難いのではないのでしょうか。したがって、スクリーンに訳詞を曲との同時進行で映し出すとか、ポルトガルの港町や、古い石畳のある路地裏の風景とかをバックに大きく映すとか、もう少し曲の中身をユーモアを交えて解説するとか、貴女自身が蒔いてきたファドの哲学を披露するとかで雰囲気を盛り上げる手を考えればどうでしょうか。最近「日栄」とかいう金融関係の会社がTVのコマーシャルでファドを垣間見せてくれます。ああいっただ情景をお客の目と耳に焼き付ければ大成功でしょう。

一口にいて、ライブハウスの雰囲気では終始したのが今回(及びいままで)のコンサートで、あれだけの大勢のお客に集まってもらうコンサートにしては、仕掛けや演出がお粗末と感じました。もっと料金を上げて、楽しい爽りのあるコンサートにしてはいかがでしょうか。少々料金が上がっても、ここまでたどり着いたファドの名人「月田秀子」の努力に文句をいうものはいません。

あまりメジャーになってほしくはないのですが、貴女が「ベコー」から飛び立ち、一人でファドの世界を切り開いてるのを目の当たりにしますと、ファンがどんどん増えて欲しいと願わずにおれません。「ベコー」で貴女に会って、シャンソンの合間に歌った「暗いはしけ」にたいそう感激しファドを初めて知ったあの時は随分昔の事になりました。表だって何のお役にも立てませんが、いつまでも熱心な「月田秀子」のファンの一人でいたいと思っています。頑張るファドの心を語りかけて下さい。

気の向くまま好きなことを書き立ててすみません。

向寒の初、くれぐれもご自愛あれ。

(大阪 O・Y之)



